

## 19 世紀ギターについて

16 世紀末ごろ、それまでの 4 コース複弦ギター（ルネサンスギター）に高音絃が加えられ、5 コース複弦ギター（バロックギター）システムが確立された。18 世紀の末に更に低音絃が加わった 6 単弦のギターが確立し、優れた作曲家、演奏家が活躍するとともに、優れたギター製作者も輩出した。

この 18 世紀末から 19 世紀前期までを一般的に「ギターの黄金時代」といっており、この時代に活躍した作曲家（当時は兼演奏家）には、スペインでは F.ソル(1778-1839)、D. アグアド(1784-1849)、イタリアでは M. ジュリアーニ(1781-1829)、F. カルリ(1770-1841)等がいる。彼らに少し遅れてフランスの N. コスト(1806-1883)、ハンガリーの J. K. メルツ(1806-1856)もギターのための作品を残した。

ギター製作者としては、ウィーンで活躍したヨハン・ゲオルグ・シュタウファー(1778-1853)、パリで活躍したルネ・フランソワ・ラコート(1785-1855)、ロンドンで活躍したルイス・パノルモ(1784-1862)等が代表的である。この時期のギターを日本では 19 世紀ギター、ヨーロッパではロマン派時代にちなんでロマンチックギターと呼んでいる。

19 世紀ギターは現在のギターに比べると小型・軽量かつシンプルな構造をもっており、弦の張力は低いため、押弦及び弾弦の際の両手各指の負担は軽減される。反面、その小ささゆえに楽器の保持方法、弦の張力の低さゆえに右手の弾弦法には工夫が必要であり、現代では一般的なそれらの方法も、当時はまだ手探りの状態であった。

現代のクラシックギターのような太く力強い音を望むことは無理であるが、反面、無理のない軽快な指運びや適度な減衰の結果から得られる音の分離の良さ、素朴で軽やかな響き、等が 19 世紀ギターの特徴であり味わいである。

19 世紀後半になると、楽器のサイズは大きくなり、弦の張力も増した結果、音に根本的な変化をもたらした。音量の増大や遠達性の向上はコンサートホールでの使用に適するものとなった。スペインのアントニオ・デ・トーレス(1817-1892)によって発達した頂点を迎え、以降今日もなお基本な構造及び視覚的なデザインはほとんど変わっていない。現代のギターの基本理念はトーレスに帰着するといつてよい。

新しいタイプのギターにはそれにふさわしい新しい演奏技法が要求される。ソルの時代には右手小指を表面板上に置く方法や、爪を使わない弾弦法いわゆる指頭奏法が行われていたが、スペインのタルレガ(1852-1909)によって左足を足台に乗せる演奏姿勢や右手と左手のフォーム、弾弦法(アポヤンド奏法やアルアイレ奏法)など独自の演奏技法を築き上げた。その基本的な理念は現代のクラシックギター奏法に継承されている。